

[講演要旨] 連続震災における災害対応課題の発見 ～1944年東南海地震と1945年三河地震の事例から～

林 能成・木村 玲欧（名古屋大学大学院環境学研究科）

1. 連続震災としての三河地震

昭和20年1月13日に発生した三河地震(M_{jma} 6.8)はアジア・太平洋戦争末期に発生したため、被害の実態や災害対応の様子があまり明らかになっていない。そこで、我々は被災者へのインタビュー調査を中心に、この震災の実態と特徴を明らかにする研究に取り組んでいる。これまでの研究では、絵画で被災の様子を再現する手法の開発(木村・林, 2005)にはじまり、海軍基地による地域支援の実態(林・木村, 2006)、頻発した前震活動を受けた事前避難(林・木村, 2007)などの一端を明らかにすることができた。

三河地震による震災を特徴づける事柄として、被災地がわずか37日前に東南海地震によってかなりの揺れ(震度5～7)に見舞われていることがあげられる。このような「連続して発生する震災への適切な対応」は防災上重要な課題であると近年認識されはじめているが、被災や災害対応の実例はほとんど知られていない。そこで、三河地震以前に東南海地震によって極めて大きな被害が生じた幡豆郡福地村(現、愛知県西尾市)における調査に着手した。

2. 幡豆郡福地村における被害状況

福地村(図1)では、東南海地震で21人もの死者が出ており、家屋の全壊率も45%に及んでいる。これは昨年まで重点的に調査を進めてきた明治村、西尾町、形原町といった、三河地震で激しい被害に見舞われた町村と大きく異なった特徴である(表1)。なお福地村では、三河地震でも229名の方が亡くなり、41%(501戸)の家屋が全壊するという被害も出ている。2つの地震の全壊家屋を合計すると1054戸となり、村の住家の86%が全壊したことになる。

福地村八ヶ尻集落で被災した黒柳岩治さんの家は、東南海地震で傾いたが、その方向に大きな木があったため支えになり倒壊を免れた。集落内には倒壊した家屋も多数あり、隣の家では死者も1名でた。地震直後に岡崎市在住の親戚が様子を見にきてくれた。そして、すぐに車力さんを手配してくれて、家を起こして簡単な補強もしてくれた。だが、その補強は十分ではなかったようで、三河地震であつという間に家がつぶれてしまった。オデイで自分を含め7人が寝ていたが、枕を並べて寝ていた祖母や姉妹の頭の上に梁が落ちてきて、5人が犠牲になった。連続して強い地震が起こるとは思いもしなかった。

発表では、東南海地震以後三河地震発生までの事柄を中心に、連続震災の規模を規定した要因について被災者の証言を元に考察する。

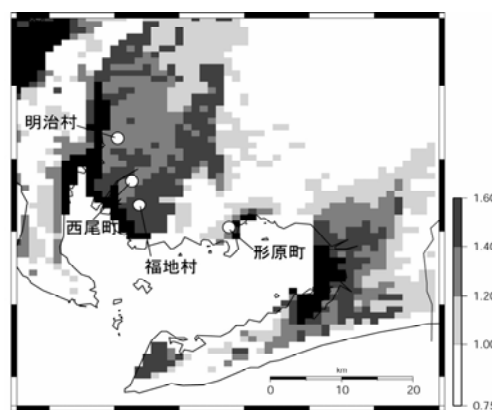


図1 三河地方の表層地盤増幅率(防災科
研・地震ハザードステーション)と本稿で
取り上げた4つの町村の位置

表1 4つの町村における東南海地震および三河地震による被害状況

	世帯数	1944年 東南海地震				1945年 三河地震			
		死者数	全壊数	半壊数	全壊率	死者数	全壊数	半壊数	全壊率
福地村	1,226	21	553	699	45%	229	501	264	41%
西尾町	4,422	4	142	350	3%	175	760	1,880	18%
明治村	2,647	1	57	172	2%	321	1,006	986	38%
形原町	1,767	0	2	48	0%	217	368	777	12%